岩手県総合計画審議会
令和３年度第４回県民の幸福感に関する分析部会

（開催日時）令和３年７月 29 日（木）10：00～12：00
（開催場所）いわて県民情報交流センター　会議室 802

１　開　会
２　議　題
（１）分野別実感の分析について
（２）令和３年度年次レポート（素案）について
（３）その他
３　閉　会

出席委員等
吉野英岐部会長、若菜千穂副部会長、竹村祥子委員、谷藤邦基委員、
Tee Kian Heng（ティー・キャンヘーン）委員、山田佳奈委員、和川央委員
欠席委員等
広井良典オブザーバー

１　開　会

○高橋政策企画課評価課長　それでは、ただいまから第４回県民の幸福感に関する分析部会を開催いたします。

私は、事務局を担当しております政策企画課の高橋でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、広井アドバイザーが欠席してございますけれども、運営要領第６条第２項に基づきまして、委員の半数以上に御出席いただいておりますので、会議が成立していることを御報告いたします。

なお、本日は竹村先生と若菜先生にリモートで御出席いただいております。

それでは、開会に当たりまして、政策企画部技術参事兼政策企画課総括課長の照井より御挨拶申し上げます。

○照井政策企画課総括課長　皆さん、おはようございます。政策企画課の照井でございます。本日は、忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。

皆様におかれましては、今年１月に実施しました県民意識調査等から得られた県民の様々な実感の変動とその要因について、５月から分析を行っていただきまして誠にありがとうございます。加えまして、今年度新型コロナウイルス感染症の影響と分野別実感の関連性につきましても追加で分析いただきましたこと、重ねて感謝申し上げます。

御周知のとおり、新しい県民計画につきましては「幸福」をキーワードに掲げておりまして、計画目標に掲げる「お互いに幸福を守り育てる希望郷いわて」の実現に向けまして、県民の実感を適切に把握することは非常に重要でございます。昨年度来この部会におかれ

ましては、その変動要因等を分析いただいてございますが、長期的視点に立ってこれからも進めていく必要があり、また、この部会でいただきました分析結果を踏まえながら今後の政策立案等につなげていきたいと考えているところでございます。

今年度分について最終の調整に入ったと伺っておりますので、本日は忌憚のない御意見をいただきながら、取りまとめ方、御協力いただければと思っております。本日はよろしくお願いいたします。

○高橋政策企画課評価課長　それでは、運営要領第４条第４項の規定によりまして、部会の議長は部会長が務めることとされておりますので、以降の進行につきましては吉野部会長にお願いいたします。

２　議　題

（１）分野別実感の分析について

○吉野英岐部会長　それでは、午前中、２時間弱ということですので、早速議題に入っていきたいと思います。

お手元の次第にありますとおり、議題の（１）、分野別実感の分析についてというところですけれども、これは前回の宿題へのお答えと聞いておりますので、事務局より御説明をお願いしたいと思います。

○池田政策企画課特命課長　政策企画課、池田と申します。私の方から説明をさせていただきたいと思います。座って説明させていただきます。

資料１、歴史・文化への誇りの可処分所得についてということで、前回集計の仕方のところで御指摘を頂戴してございました。11 番、誇りを感じる歴史・文化が見当たらないという回答理由者数の可処分所得の状況はどうなっているのかということで、今回は各所得の総数と、あとはその内訳ということで、100 万円未満ですと 93 人分、このうちここの回答をしている人が６人ということで、パーセンテージ的には 6.5％程度というような形での今回整理をし直しさせていただいたというものでございます。

比較的多い 500 万円未満のところを見ても、10％未満というような形になっているということで、700 万円から 1,000 万円のところは 16.7％と来ていますが、全体数が 18 人中３人いたのでということで、多分出ているというところがあろうかと思います。

今回は整理の見直しということで、こういったような形で今回整理をさせていただいたというものでございます。

以上です。

○吉野英岐部会長　資料１の御説明をいただいたとおりですけれども、左側に収入階層がありまして、それぞれの階層毎に歴史・文化の誇りのところについて、今年調査であまり感じないと感じないの合計した回答者数が出ております。それぞれの各所得階層に占める回答者の割合も出していただいています。階層毎に大きく違うかというと、全体のｎも小さいので、すぱっと結果が見えるような形ではないのですけれども、これは谷藤委員からですか、御質問があったところですので、いかがでしょうか。

○谷藤邦基委員　特筆すべき特徴が出ているかというと、それほどでもないかなと。実際に所得別の回答者割合というのとの比較してみても、そんなに顕著な数値、結果が出ているわけではないので、あまり関係ないのかなと思いますが、そういう観点でいうと、数は少ないのですけれども、700 万円以上 1,000 万円未満のところで３人出ているというのがむしろ気になるところかなと。ただ、あくまでも数が少ないので、だからどうのとまでは言えないのですけれども、ここが全部、500 万円以上のところが全部ゼロであればあまり気にならないと言えば気にならないのですが、そこだけ飛んで出たというのは何でだろうと。ただ、数が少ないからたまたまかなと、その辺は何とも言い切れないのですが、ちょっと気になったところと言えばむしろそこでした。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

そのほかの委員の方、この結果を見て御感想があれば伺いますけれども、よろしいですか。

「なし」の声

○吉野英岐部会長　では、こういった結果が出て、さっきもお話あったとおりですけれども、すぱっと傾向を読み取れるというところまではなかなかちょっと難しいのではないかということで進めたいと思います。

では、続いても資料２について御説明をお願いします。

○池田政策企画課特命課長　それでは、資料２ということで、新型コロナウイルス感染症の分野への影響と分野別実感の関連性の分析についてというところでございます。

前回の部会の中で、基準年比較と前年比較等が入ってかなり混在したような形になっていたということも受けて、今回資料内容としては、レポートとしては基準年比較という形で再整理をさせていただいております。それに併せて、部会長とティー委員と和川委員にちょっと御協力をいただきまして、新型コロナウイルス感染症のこの資料２の内容を調整させていただいたというものでございます。こちらの方につきましては、レポートとしても、今回というよりは追加という形で後ろの方に載せるようなイメージで現在考えているというものでございます。

それでは、内容の方に入らせていただきます。追加分析の内容ということで、今回県民意識調査の方でも新型コロナウイルス感染症の影響ということで、各分野の実感に合わせてよい影響からよくない影響を感じるまでの実感をそれぞれ聞いた結果が図Ａでございます。こちらの方につきましては、せんだっての県民意識調査の結果の中でも御報告はしているのですが、よくない、あまりよくないといった回答がかなり大きな割合を占めているというようなことになってございます。

おめくりいただきまして、次のページでございます。２ページ目です。こちらの方につきましては、分野別実感の回答状況ということで、昨年と今年の回答状況の比較をお見せしてございます。こちらの実感の変動も併せて今回分析をしているということでございま

す。

おめくりいただきまして、３ページに分析の手法ということでお示しをさせていただきました。今回分析した内容といたしましては、昨年と今年の実感平均値の比較ということで、時系列分析をさせていただいているというものでございます。

２つ目が新型コロナウイルス感染症の影響として、よい影響からよくない影響まで聞いている実感と、あと分野別実感の回答の割合の方からクロス集計分析をさせていただいているということでございます。

最後に、新型コロナウイルス感染症の影響別に分野別実感平均値の差の検証ということで、どちらともいえないと影響を感じないといった新型コロナウイルス感染症の影響を顕著に受けていらっしゃらないような方々と、あとよい影響、よくない影響を感じた方々との比較をすることによって、その差があるかどうかというのを検証させていただいたということでございます。

３番の結果の概要ということで、おめくりいただきまして５ページのところに、前回までも表としては載せていたのですけれども、前年比較の時系列分析の結果を載せてございます。こちらにございますとおり５分野、子育て、子どもの教育、地域の安全、仕事のやりがい、必要な収入や所得といった５分野については、実感が上昇をしているということになります。逆に、低下しているのが心身の健康、地域社会とのつながり、歴史・文化への誇りという３分野が低下をしていると。残り４分野が横ばいというような状況になってございます。

続きまして、クロス集計分析の関係でございます。６ページを御覧ください。６ページを御覧いただきますと、着目していただくのはよくない影響を感じるというところを見ていただいた方がよろしいのかなと思っているのですが、こちらの方がよくない影響、あまりよくない影響を感じるというところを合算した割合をお示ししてるというところになるのですが、左側の分野別実感で感じる、やや感じると答えている人のところにおいても、50％から 60％ぐらいがここのところでは、心身の健康ではいらっしゃると。あまり感じない、感じないと答えている方が 64.9％、70.2％といったような形で、同じように高い割合だということで、実感のよしあしと新型コロナウイルス感染症の影響というのは、なかなかこの部分では当たらない部分となっているような状態になるということでございます。

続きまして、13 ページです。13 ページに新型コロナウイルス感染症の影響の実感の区分によっての実感平均値の差ということで、先ほどもちょっとお話をしたのですが、どちらでもない、影響を感じないといったところに比べて、よい影響を感じる人、もしくはよくない影響を感じる方の実感の平均値はどういう状況にあるのかというようなことを比較してみたというものでございます。

こちらを見る限り、よい影響を感じるという方は、どちらでもない、影響を感じないという方に比べて実感平均値がどの分野においても高い傾向にあると。よくない影響を感じるということについては、家族関係、住まいの快適さ、必要な収入や所得では低下していて、地域社会とのつながり、歴史・文化への誇り、自然の豊かさでは上がっているというような状況になっています。

こちら、今回下がっている家族関係、住まいの快適さ、必要な収入というところは下がっているように見えるのですが、５ページのところで前年比較のところございます。今回

よくない影響を感じる、実感が下がっているように見受けられている家族関係ですとか、あとは住まいの快適さ、あと必要な収入や所得というところを見ていますと、必要な収入や所得のところでは実感が上がっていますし、残りの２分野についても横ばいというような状況になっているというようなことになってございます。

ということで、最終的にはこのような状況でございますので、新型コロナウイルス感染症の影響と分野別実感の間には、明確な関係性を確認することはできなかったというような形で今回整理をさせていただきたいと考えているところでございます。

事務局からは以上です。

○吉野英岐部会長　今資料２を通しで説明していただきましたけれども、これは今年の報告書の後半にこれを載せるということになる予定ですけれども、コロナウイルスの感染というのが昨年の２月ぐらいからですか、ありましたので、今年のこれは２月ぐらいでしたか、調査をしたのは。その時点で、ここ１年ぐらいたっているところで県民の皆様にお伺いしたコロナウイルスの影響、よい、よくないということを項目別といいましょうか、１ページで、13 になるのですけれども、項目別に分けてどういったところにどういった影響が特徴的に見られるかというのをまず作っていただいて、さらに２ページでそれぞれの項目において令和２年と、コロナの前と令和３年、コロナの感染が広がっていたというときの実感度合いを聞いているということでした。

最終的には、実は実感が上がっているのもあるし、下がっているのもあるし、横ばいもあるということで、ここは非常に解釈がまだ難しいところで、おしなべて上がっていれば一つの傾向だとも言えるし、おしなべて下がっていればこれはやっぱりかなりコロナの影響も見えるところですが、項目というか、分野によってはなかなかその関係性が見づらいようなところもあるということで、調査結果を中心に書いていただいたというのがこの全体の流れになっております。

では、この資料２について御意見、御質問があれば伺いたいと思います。

○谷藤邦基委員　分析としては多分このとおりなのだろうなと思いますが、多少自己批判を含めて言うと、調査票の設計のところでコロナの影響でと聞いている形になっているのです。幸福実感と関連づけて回答者が回答してくれているかどうかというところがちょっと怪しいかなと今にして思っているところはあります。だから、これは設計段階でいろいろ議論があって、結局別途聞いた方がお互い、回答者も楽だし、分析も楽だよねということでこういう形になったと思っているのですけれども、ただ表現を見ると幸福実感の方はあなたの実感を聞くという問いかけになっているのですけれども、コロナの影響については一般的な聞き方になっているのです。それを今関連づけようとしているのだけれども、少なくとも調査票の設計段階では、そこの関連づけを意識していなかったなというのがちょっと今自己批判的な意味で感じているところではあります。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

そのほかよろしいですか。若菜委員や竹村委員はよろしいですか。

「なし」の声

○吉野英岐部会長　結果はこのとおりですので、これはこの形でお出しするものだと思っていますので、これをどう読み込んでいくかというのがさらに我々の部会に課せられたタスクですけれども、今の谷藤委員の御感想というのをもう一回ちょっと確認すると、実感というのは個人の実感なので、まさにその回答者がどうだかというのを聞くものになっていると。一方で、コロナの影響というのは、回答者本人だけというよりは、一般的に見てコロナの影響はどうなのかと聞いているところがあって、そこがぴったり重なり合っているかどうかというのは、やはりまだちょっと１回の調査ではよく分からないということもあって、その辺り今後また改善することが必要であれば、改善することも考えられますけれども、取りあえず今回についてはそういう聞き方をしていますので、この２つの関連性をちょっと探ってみたところ、なかなかぴったりというか、すぱっと分かるような形にはなってはいないのではないかと思いました。

よければ、これはまた後で、レポートの後半に入るところでまた御議論する場があると思いますので、コロナの各分野への影響と分野別実感の関連性についてはこのような形でまとめていきたいという事務局側の御提示と受け止めて、おおむねこの形でと委員会としては判断したいと思います。

それでは、引き続いて、並行して行われていました幸福について考えるワークショップの意見等についてお願いします。

○池田政策企画課特命課長　それでは、資料３に基づきまして御説明をさせていただきます。

本ワークショップのところにつきましては、県民計画における県民の幸福を守り育てるという基本目標に向けて､県民が幸福について考える機会を提供するということとともに、ワークショップを通じて県民の幸福感に関する意識を把握しようということで今回実施をさせていただいているものでございます。

その中で、春先に部会の委員の皆様にお伺いしながら対象とした分野別実感としては、実感が低下している地域社会とのつながりの部分ですとか、あと去年に比べて実感が上がっている必要な収入や所得というところについてワークショップを開催させていただいているというところで、まだ途中なのですけれども、現時点のものにつきまして御報告をさせていただきたいというものでございます。

現在実施としては５回やっておりまして、最終的に今分かっている範囲では７回まではやる予定としているところです。今実施した４回までの方の報告が来ていますので、そちらの御報告を今回させていただくというものでございます。

第１回、第２回につきましては、６月 19 日に県南におきまして実施をしております。女性６名、男性 10 名という形でありますし、第３回につきましては県北の方で実施しておりまして、８名の方で、第４回につきましては県央で 29 名の方ということでワークショップの方を開催させていただいているというところでございます。

そちらの方から頂戴しました主な意見ということで、２ページ以降のところに取りまとめをさせていただいているものでございます。地域社会とのつながりという分野につきま

しては、第１回目、第２回目、比較的若い方が多くいらっしゃるということで、仕事、日々の生活で地域とのつながりが普段から関わりが少ないといったような方の御意見も頂戴しております。

あわせて、新型コロナウイルス感染症の影響についてもお聞きしておりまして、そこのところではやはり地域のイベントがなくなっているというような御意見が男性、女性とも出てきていると思ってございます。

おめくりいただきまして、３回目、４回目というところになってくるのですけれども、あとは時間の使い方が変わった、健康教室みたいなのが休止という、そういったような御意見もありますし、あとは構造的な問題という話になると、４回目の方ですと家庭内の世代交代ができていない、次の世代の参加が少ないというような御意見もいただいています。

コロナ関連というところにつきましては、やはり人混みを避けるとか、地域行事への参加の不安が大きいというようなところについて、御意見を頂戴しています。

５ページに入りまして、必要な収入や所得というところでございます。一般的というか、コロナを含めないでの御意見なんかを見ていると、株価の上昇みたいなものが書いてあったりとか、給料が増えたとおっしゃる方もいらっしゃれば、やはり向上した実感は特にないという方もいらっしゃって、それぞれの属性というか、御職業とかそういったものによっても大きく異なってきている部分があるのかなというようなところもございます。

新型コロナウイルス感染症の関係ということで、給料は増えていないという御発言もあれば、10 万円給付を収入として考えているということの方もいらっしゃるところではあります。あとは、自粛生活、休校で子供が在宅する機会が増えて食費がかさんでいるとか、そういったような実情のお声も頂戴しているところでございます。

今回の取りまとめとしては、こちらの当初の趣旨としては要因の具体的な内容を補足するということで、その他の自由意見とか、今回のワークショップの理由というものを活用していこうと考えていたところなのですが、先ほどの資料２のところでの御説明のとおり、今回この新型コロナウイルス感染症のところについては明確な関係性が見えてこないということで、今回のところではこの具体的な内容としては、伝え方は少し難しいのかなと考えます。当然そういった趣旨では集めているので、できれば参考資料の方としては掲載をしたいとは考えているのですが、レポートの方への直接の反映というのは、今回は難しいのかなというのを考えている次第でございます。

事務局からは以上です。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。これ、まだワークショップ開催中ということで、あと昨日とあさってもやるということでよろしいですか。

○池田政策企画課特命課長　はい、そういう予定で。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

ワークショップについては、若菜委員にも大変御苦労かけていますけれども、何か開催をしていて気がついたこととかあったら、ちょっと補足で教えていただければと思いますが、いかがでしょうか。

○若菜千穂副部会長　今年度は、ちょっと実際には私現場に行けていないのですが、この資料を見てもワークショップ自体は結構丁寧にコロナ禍でも開催が何とかできてよかったなというところと、あとはこの結果については皆さんも見て思われたと思うのですが、そのとおりだよなというか、本当に多様な意見の集合なのだなというのが、ただこれだけ多様な結果がちゃんと出ているので、これはこれで是非使っていただければなと思います。よろしくお願いします。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

そのほかの委員でお気づきになった点があれば出していただければと思いますが、いかがでしょうか。

では、和川委員。

○和川央委員　意見ではなく、確認と、あと質問３点ございます。

まず、読んでいてなるほどなと、非常に腑に落ちるような内容で、非常にいい資料だなと思って拝見しておりました。

そうした中で、参集者数、女性という性別の特性だけ書いてあるのですけれども、例えばこのときには医療従事者をターゲットにしましたとか、何かターゲットにしたものがあるのであれば、ちょっと教えていただきたいなというのが１つ。

２つ目は、それに付随するのですけれども、この方々をどうやって集められたのか。公募で集めたのかとか、あるいはどこかの施設に行って、その施設の人たちに声をかけたとか、参集した人をどのように集められたのかというのをちょっと教えていただきたいなというのが２点目。

３点目は、ワークショップの結果がこのような形で出ているのですけれども、多分ここに至るまでに様々な議論をすることでこういった意見が出たのかなと思います。どういった形でワークショップを進めたのか、そしてどういう形でこういう意見を聴取したのかというこの３点を、細かくではなくていいです。大体で結構ですので教えていただけるとイメージが深まるなと感じました。

○吉野英岐部会長　では、ワークショップの運営について、直接御担当された廣田さんかな。

○廣田政策企画課主任　事務局の廣田と申します。ワークショップなのですけれども、まずターゲットなのですが、２番目の質問と関連するのですけれども、参集としましては通常地域団体等でワークショップを行っている団体で行っている地域づくりの活動等とともにワークショップを実施しましたので、基本的には地域づくりに参加されている方ですとか、第１回、第２回の県南地域ですと、例えばまた別途イベントと併せてやりまして、婚活の関係のイベントとともにやりましたので、男性、女性というのはありますけれども、婚活をされている年代の男女となります。

県北、県央の方は、一戸と盛岡で実施したものですが、こちらについては既存の地域づ

くり活動の自治会の対応の中で開催したものとなっております。

３つ目の質問なのですけれども、ワークショップの進め方のところだったのですけれども、まず幸福について考えるワークショップということで、あなたの自分自身の幸福感を分析してもらうというシートを用意しているのですけれども、そちらについて県民意識調査等の質問項目に似たような項目を回答してもらいつつ、自分自身の幸福をちょっと考えてみると。要は、今回の県民意識調査で答えていただいた回答項目みたいなのを答えてもらった上で、県が考える幸福感みたいなのをちょっと認識してもらった上で、地域のつながり、あとは所得、収入ということについて、実際にこれが 5,000 人で県で調査をしますということをアナウンスした上で、そういった調査の結果、下がったり上がったりという状況が見られるので、皆さん自身の実感はどうですかというものをちょっと聞いて、意見交換していただいているという形で進めさせていただいております。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

和川委員、いかがですか。大体状況は、イメージが。

○和川央委員　はい、イメージが湧きましたので。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

そのほか、進め方の御質問でも結構ですけれども、ありましたらお願いいたします。

ちなみに、５回目と６回目はぎりぎり終わっているところですよね。５回目はどのぐらい参加者いたとか分かりますか。まだ届いていない。昨日だから、まだか。

７回までやった後でもう一回資料を作っていただいて、最終的な確認を８月以降ですか、そのときにもう一回やるということで、取りあえず今中間報告のような形でしょうか、これ。

では、竹村委員、お願いします。

○竹村祥子委員　きちっと確認できていないのですけれども、すみません、参加者が自分ができることというのをたしか最後に表明するような形で終わっていたのではないかと思っているのですが、ここに上がっている考えられる解決策とか自分ができることというのが、人数分は上がっていないと思うのですけれども、これは内容についてこの資料の方を作るときに似たような内容をまとめられたということなのでしょうか。それとも最後の自分ができることというようなところにあまり回答が出なかったというようなことなのでしょうか。

○吉野英岐部会長　では。

○池田政策企画課特命課長　資料の作成については、こちらの方はちょっと私どもの方でも加除できないので、そのまま載せさせていただいているというような形になります。

○若菜千穂副部会長　ちょっと補足なのですが。

○吉野英岐部会長　では、若菜委員、お願いします。

○若菜千穂副部会長　竹村先生がおっしゃったのは、多分昨年度は幸福宣言みたいな、昨年というか、その前とかはやっていたのですけれども、今回は幸福宣言まではいいよねという話、幸福宣言はあくまでもワークショップのテクニックの一つで、今回のテーマである所得とつながりについてだけの幸福宣言では毎回ないので、そこについての反映ではなく、この分野での解決策を聞いて出してもらったということで、幸福宣言とは別ですし、幸福宣言は恐らく今回は多分やっていないと思います。

○竹村祥子委員　承知しました。どうもありがとうございます。

前は個々人が何ができるかみたいなところで非常に具体的なものが出てきていて、それはなかなか興味あることだなと思ったものですから、技法の違いだということで承知しました。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

そのほか御質問、一個一個の興味深い意見、これあるかもしれませんけれども、山田委員、いかがですか。

○山田佳奈委員　意見といいましょうか、感想という形になるかもしれません。大変貴重な御意見拝見できて、大変ありがたいと思っています。

これまでも議論してきたところですが、特に今回、この地域社会とのつながりですとか必要な収入や所得というところは、特に属性の何十代、男性、女性というところと併せて拝見できています。例えば地域社会とのつながりというところになりますと、やはりもともと仕事がお忙しくてといったことで、どういう状況が背景にあるのかということがより見えてくるかなといった、世代での違いというのがやっぱり見えてくるかなといったところです。また、これも地域行事に限らないと思うのですけれども、今まではこういうことをしていく、我々が前提としてきた、当たり前としてきた状況というのが今回ちょっと違う形で見詰め直されているといったところも、意見が出てきたのかなと思っております。

あと、第４回の方で、コメント６ページですけれども、収入の方については、この部会の中でも大分出てきました。前に委員の御意見としてもあったと思いますけれども、今回、「必要な」というところの定義が人によって違うのではないかということでお答えになっている方もいらっしゃいまして、ここをどう解釈していくかなと。私の勝手な予想としては、今年度の結果はかなり変わるのではないかなと思っていたので、ひょっとするとこの「必要な」という文言でそれぞれの方がどのように解釈するかというのが変わってきた面もやっぱりあるのかなと思いまして、感想になりますけれども、改めてここを考慮して解釈していくことが必要かなということを感じました。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。

そのほかは。

では、谷藤委員。

○谷藤邦基委員　感想になってしまうのですけれども、しかも今さらながらではあるのですが、必要な収入や所得といったときに、私あまり資産効果考えていなかったなという点があります。株の話がちらっとですけれども、出ているのです。５ページで左上のところにアメリカ大統領が替わったため株価が上昇し、儲けた、20 代女性、６ページに行って、左側の真ん中辺りですけれども、株取引をしている人は所得が増えたと聞いている、これは聞いているので、自分のことではないのですが、これは 50 代女性です。右に行って、一番下のところですけれども、右の欄の一番下、資産運用について学ぶ機会があればいい、40 代女性、これみんな女性なのです。

例えばレポートの素案でいうと、25 ページのところに表の 14 で必要な収入や所得の実感において有意な変化があった属性と基準年差ということがあって、女性、年代 60 から 69 歳、職業で専業主婦。正直私何でこの辺が高くなったのだろうなと思っていたのですが、これを見て何となくもしかしたら資産効果かなというのが今ちょっと思っているところです。そういう視点を分析の時点で持っていなかったなというのが今の反省です。

以上です。だからどうのという話にはつながらないのですけれども、ちょっとそこは見方として欠けていたなというのは今気づいたところでした。

○吉野英岐部会長　いろいろな人に意見を、生の声を聞く機会をつくっていただいたので、考えてみればいわゆるフローだけではなくてストックからの利益というか。

○谷藤邦基委員　キャピタルゲイン的なところですよね。

○吉野英岐部会長　はい。それがあったのかもしれないと。

○谷藤邦基委員　かもしれないですね。

○吉野英岐部会長　あるいは、そこにちょっと興味をお持ちになっているかもしれないと。つい我々は毎月入ってくる月収とか。

○谷藤邦基委員　定額給付金とか、そういったところは考えますが。

○吉野英岐部会長　キャッシュのフローでどうしても見ていますけれども、もうちょっといろんな見方があるということもこの意見の中から読み取れる感じですね。これは、みんながそう感じているという意味ではなくて、こういうことをお感じになる方がやっぱりいらっしゃるのだということですね。

○谷藤邦基委員　しかも、全部女性というところ。たった３人ではあるのですが、全部女性なのです。

○吉野英岐部会長　しかも、年代も幅広くということですね。ありがとうございました。

そのほか御感想でもよろしいですけれども、いいですか。

まだ中間報告なので、今後また意見を拾い集めていただいて、こういった考えもあるのだなということを今後の分析に生かしていくということになると思いますけれども、私たちはやっぱり見落としがちなところとか気づかないようなところでも、県民の方々にとってみれば大事な視点になっているということもあるので、やっぱり広く聞くことの意義はあるなと思います。

私も真ん中辺で地域行事というのはあるにこしたことはないというか、あることはいいことかなと思うのですが、逆につながりが大き過ぎてというようなことをお感じになっている方も確かにいるのだろうなと。ちょうどいいという言い方がいいかどうかは、適切かどうかは別としても、確かにこれまで地域行事というのは普通にやってきたし、やるものだと思ってきていると思っていましたけれども、それが止まったり、今のようにできなくなったことを皆さんどう受け止めているのかという中には、こういう感じで多過ぎたというような、これまでちょっと多過ぎたなというようなお感じの方も確かにいらっしゃるのだろうなという意味では、いろんな見方をしなければいけないなということに気づかされたところはあります。ありがとうございました。

では、これはまだ、今お話あったとおり中間報告ですので、引き続き次回までに、ちょっと忙しいですけれども、まとめていただいて、やっぱり私たちの分析に力を貸してくださるような意見がたくさん集められることを期待しております。よろしくお願いいたします。

以上、これまでやってきた、前回の委員会から今回の委員会にかけてやってきた経過、あるいは中間の御報告をした上で、そろそろレポートを作っていくということになりますので、それの素案というのでしょうか、今の段階では素案と呼ぶそうですけれども、素案について一通りまとまってきましたので、これについてまた皆様の御意見をいただきたいと思います。

（２）令和３年度年次レポート（素案）について

○吉野英岐部会長　それでは、令和３年の年次レポートについて御説明お願いしたいと思います。

○池田政策企画課特命課長　それでは、資料４―１の令和３年度年次レポート（素案）について御説明をさせていただきます。

おめくりいただきまして、目次のところでございます。前回と変わっているところというところでは、１つは４の３です。第４章、４の３のところで、分野別実感の分析につきましては、去年は上昇の部分１分野だけで、心身の健康の基準年比較がちょっとできなかったので、分析はなかなか難しいということで、低下を中心に分析したということから、低下というのを一番最初に載せていましたけれども、実感の分析上としては上昇、低下、横ばいという形で、今回は上昇４分野についても分析していることから整理をさせていただいているものでございます。

おめくりいただきまして、第１章、本報告書の内容ということで、前回部会からの御指

摘を受けまして、こちらの方に趣旨と概要を分けて記載をするというような形で入れさせていただいております。趣旨のところにつきましては、県民計画の推進に当たって、政策評価を行って政策立案に反映させていくということを目途に、本部会においてその基準年との実感との比較を行って、その変動要因の分析を行いましたということを記載した上で、今年の分析結果の概要について記載をさせていただいております。こちらにつきましては、実感の変動、上昇、横ばい、低下がそれぞれ４分野であるということで、それらの変動要因の分析を記載しているほか、併せて先ほど資料２の方で御説明をさせていただきましたけれども、新型コロナウイルス感染症の分野別実感への影響等についても追加の分析を行っているということを記載させていただいております。

おめくりいただきまして、第２章のところにつきましては、分析事項ということで記載の整理をさせていただいております。２ページの下の方のそれぞれの丸のところ、今回の分析項目です。すみません、前回お出ししたときに、後ろの分析方法との整合がちょっと取れていないところがあったので、そちらの方は分析方法と併せて記載を修正させていただいてございます。

おめくりいただきまして、４ページ、第３章、調査結果ということで、こちらの方からは県民意識調査の結果の御報告をさせていただいているというものでございます。こちらの方につきましては、今回においては実感平均値を用いていますので、図１のところで実感平均値が基準年、3.43 から 3.52 に上昇しているというようなことを記載しておりますし、おめくりいただきまして、６ページには各分野別実感がどのように変動しているかということをお示しさせていただいた上で、７ページのところにおいては幸福を判断する際に重視した項目がどれかということで御回答いただいておりまして、特に高い結果になっているのが健康状況、家族関係というものであるということをお示しさせていただきました。

８ページには、先ほど資料２の方でもお示しをさせていただいた内容になっていますけれども、新型コロナウイルス感染症の影響の回答結果というものをお示しさせていただいております。

続きまして、９ページ、補足調査の結果でございます。こちらの補足調査の結果につきまして、こちらは 600 人を対象に、各圏域 150 人ということで調査を行っているものでございます。

おめくりいただきまして、10 ページの表３のところには、それぞれの各実感、分野別実感に対しての各実感の上位３位までの回答結果というものを並べて、主な要因というか、分野別実感の回答理由と関連が強い要因として選択された主な項目としてお示しをさせていただいているものでございます。

表４の方につきましては、基準年に比べて実感が上昇、横ばい、低下したような方々の理由毎に整理をいたしまして、分野別実感の回答理由と関連が強い要因として選択された主な項目の実感の変化別の結果ということで載せさせていただいているというものでございます。

それを踏まえ、12 ページでは、第４章においては分析の結果ということで、まずはじめに分析の方針等ということでお示しをさせていただいてございます。分析目的、分析対象は先ほど御説明したとおりですし、分析方法といたしましては時系列変化の有無ですとか、

属性差の有無から分野別実感の変動要因の推測というようなことを行っているほか、分野別実感が一貫して高値または低値で推移している属性、その要因についても併せて分析を行ったということになっております。

おめくりいただきまして、14ページのところに県民意識調査の結果から得られた基準年比較で上昇、横ばい、低下というものの実感平均値の差を示しております。オレンジで色をつけているところが上昇、青のところが低下、それ以外は横ばいというような形になってございます。

続きまして、16ページを御覧いただきますと、こちらの方につきましては同じく県民意識調査の属性別の実感平均値の一覧表ということで、一貫して高値または低値となっているものをお示ししております。黄色の部分が低値で、ピンクのものが高値ということになっております。このとおり、必要な収入が極めて低い傾向にありますし、自然の豊かさについてはおしなべて高いと、すべての属性が高いというような結果になっているというものでございます。

それを踏まえまして、17ページから分析結果の記載をしてございます。主観的幸福感につきましては、「幸福だと感じる」から「幸福だと感じない」の５段階の選択肢に応じて５点から１点を配点したところ、平均点が3.52点ということで、基準年よりも0.09点上昇していると。統計処理であるｔ検定を行った結果、これは上昇していると考えられるということで整理をしていると。

属性別に見ますと、男性が低く、女性が高い傾向にあったり、年代別では50代が低く、60代が高くなっているというようなことの傾向が見られているということでございます。

主観的幸福感において有意な属性変化があったというものについては、表７にお示しをしてございます。

18ページ、19ページについては、属性別の集計結果ということで、一元配置分散分析の結果を載せています。

次に、20ページ、こちらから分野別実感の方に入っていきます。分野別実感、冒頭のところでもお話をさせていただきましたとおり、12 分野中４分野が上昇、４分野が横ばい、４分野で低下というような形になっているというものでございます。実感が上昇した分野といたしましては、「心身の健康」というところです。こちらの方につきましては、実感平均値が3.07点ということで上昇しているということになります。

表９、「心身の健康」において有意な変化があったのはということで、表９で示しているとおりということになります。

分野別実感が上昇した要因、こちらの方につきましては、補足調査において体の健康と心の健康に分けてお聞きしていますので、それぞれの理由から整理しており、最終的には要因として睡眠・休養・しごと・学業・運動などの暮らしの時間配分がよかったことですとか、健康診断の結果がよかった、持病がないこと等の理由を整理してございます。

「子育て」の実感というところにつきましても、こちらも0.08点上昇しておりまして、表 10 において有意な変化があった属性についてお示しをさせていただいているというところでございます。こちらにつきましても、子供を預けられる場所、預けられる人があるということですとか、配偶者が家事に参加していること等々の要因が推測される旨記載しています。

一貫して高値または低値で推移している属性ということで、低値で推移している属性が３つございます。20 歳代、ひとり暮らし、子どもはいないということで、こちらの内容を見てみますと、子育ての費用ですとか預けられる場所、サービス内容等の要因が挙げられているということになります。

続きまして、「子供の教育」の実感というところで、こちらの方につきましては 0.10 点の上昇ということでなってございまして、有意な変化があった属性というのが表 12 にお示しをさせていただいてございます。

そのような内容を踏まえて、上昇した要因としては学力を育む教育内容となっていることですとか、人間性、社会性を育むための教育内容等の要因が挙げられているということになります。

③ということで、一貫して高値または低値で推移している属性とその要因ということで、子どもはいないという属性のところの実感の平均値が低いということを踏まえて要因の推測を行っており、人間性、社会性を育むための教育内容が十分とは言えないというようなこと等々を掲げているというものでございます。

（４）として、「必要な収入や所得」の実感ということで、こちら 0.13 点上昇ということになってございます。表 14 のところに基準年比較で有意な変化があった属性をお示ししてございます。次のページにも続いております。こちらの要因といたしましては、自分の収入・所得額が十分であるとかというようなこと等々を理由として掲げているものでございます。

一貫して高値または低値で推移している属性とその要因ということで、こちらの方比較的低値で推移している属性が非常に多いということで、このところについてはこの実感の感じない、あまり感じないというような方の回答理由から要因を推測させていただいております。自分の収入・所得額、家族の収入・所得額等が十分とは言えないというような内容で推移をしているものでございます。

続きまして、実感が低下した分野ということで、28 ページなのですけれども、こちらの方、「余暇の充実」ということで 0.08 点低下していると。変動があった、有意な変化があった属性は、表 16 のところに示している内容となっております。こちらが低下した要因といたしましては、自由な時間の確保が十分にできなかった、知人・友人との交流が減った等の理由が推測されております。

一貫して高値または低値で推移している属性ということで、年代的には 30 代から 50 代、常用雇用者、２世代世帯、子どもはいないというような属性で低値で推移しているということですが、これらの要因を分析すると、基本的にはどの属性も同じ結果ということになっていて、自由な時間が十分に確保できなかった、趣味・娯楽活動の場所・機会が少ない、知人・友人との交流が少ないというような内容となっているというものでございます。

続きまして、「地域社会とのつながり」というところで、こちらの方については 0.25 点低下ということになっています。表 18 にお示ししていますように、基準年に比べて有意な変化があった属性というのは、このように多岐にわたっているというような状態にあります。

それらの要因を検討した結果、隣近所との面識・交流が減った、自治会・町内会の活動への参加が減ったというようなことを整理しております。

次に、「地域の安全」というところです。「地域の安全」のところなのですけれども、こちらの方については 0.06 点の低下ということになっています。「地域の安全」において有意な変化があった属性と基準年については、表 19 に示しているというところです。

分野別実感が低下した要因のところなのですけれども、こちらの方の推測としては前回自然災害の発生が多くなっていることとだけ書いていたのですが、今回までの間に委員の方から御意見を頂戴しまして、被害も大きくなってきているでしょうということで、これは自然災害の発生が多く、被害も大きくなっていることというような形での文言の整理をさせていただいております。交通事故の防止対策が十分とは言えないこと、社会インフラの老朽化が懸念されることというようなことが要因として掲げられているということでございます。

続きまして、「歴史・文化への誇り」ということで、こちらの方も 0.11 点の低下ということになってございます。表 20 の方には、有意な変化があった属性をお示ししております。

こちらのところ、分野別実感が低下した要因ということで、誇りを感じる歴史や文化が見当たらないこと、あと２つ目のところなのですが、地域のお祭り・伝統芸能のところについては、関心がないというような属性で前回整理していたのですが、ほかの項目のところに実は同様の記載がございまして、地域の文化や伝統芸能等に関心がないというのとかぶってしまう内容になっております。

一方で、委員の方からも、お祭りの開催とか、そういったようなところも影響があるのではないかというお話があって、確かにここの項目の整理としては、お祭りの開催とか、そういったようなものが実情に沿っているのかなということで、今回記載の方を修正させていただいてございます。地域のお祭りの開催・伝統芸能の発表の機会が減少していることというような形で整理をさせていただいております。あと、その地域で過ごした年数が短いことということで記載をさせていただいています。

この案件のところは、後で御相談をさせていただく必要があるかなと思って、当初の考えとしては地域として短い期間であるので、地域の伝統や芸能等々に興味、関心があまりないというような整理等をしてはいたところなのですが、属性のところを改めて見てみると、居住年数が長い方々がほとんどということもあって、ここの解釈のところは後で改めてちょっと御意見を頂戴する必要があるのかなと考えてございます。

残り 33 ページからは、実感が横ばいということで、それぞれ基準年比較、属性の状況等を記載させていただいております。

37 ページからは、まとめということで、今まで御説明させていただいたような内容を記載しておりまして、41 ページから追加分析という形で、新型コロナウイルス感染症の分野への影響と分野別実感の関連性の分析というところについて整理をさせていただいているところでございます。

最後の 55 ページ、56 ページのところにつきましては、昨年同様のページということで記載を整理させていただいているもので、素案とさせていただきたいと考えております。

資料４―２の方につきましては、本内容について取りまとめをしたものを昨年と同様の形で整理させていただいたものを御用意してございますので、こちらも併せて御意見を頂戴できればと考えてございます。

事務局からは以上です。

○吉野英岐部会長　御説明ありがとうございました。

資料１に基づきまして、これから総合計画審議会に提出する部会のレポートについての全体的な構成について、これまでの議論を踏まえた上での修正をかけた上での今日の時点での内容の御紹介ということでした。

これも御質問、御意見があれば、まず御自由に伺いたいと思います。

では、谷藤委員、お願いします。

○谷藤邦基委員　もう内容について、今さらどうこうということはないと思っていますので、ただあとは読みやすさというか、そういった観点からちょっと気になったところ、44ページのところ、コロナの関係の結果の概要のところで、（１）、（２）、（３）、それぞれ書いていただいているのですけれども、要はこれ何を基にこういうことを言っているのかというものがちょっと分かりにくいので、この（１）の分野別実感平均値の２時点比較の次、例えば括弧して表Ｃとか、そういうのを入れていただくと、そこを見ればいいのだなというのが分かるかなと。要は、これまでも何ページにその表がありますというのを入れてくださいというようなことを言ってきましたけれども、同じ趣旨です。だから、表Ｃ、表Ｄ、表Ｅとかとそれぞれについていると、そこを見ればいいのだなというのが分かると思うので、そこはちょっと入れていただくといいかなと。

あと、これ表の作り方なのですけれども、47ページ以降の表Ｄの各表について、中の数値の割合を示していただいているわけです。例えば表Ｄ―１―１だと、よい影響を感じると、それから感じるプラスやや感じるのクロスしたところが 230 で 16.6％ですと。この 16.6％は、何に対する 16.6％かなというのは、この表を見た瞬間には分からないのです。計算してみると、横計に対する割合だなというのは分かるのですけれども、縦計も横計も 100％はどっちもなっていないから、どっちに対する割合かというのがちょっと分かりにくい。

ただ、合計欄の割合というのは、それはそれで意味があるのでしょうから、例えば右側の横計の欄を全部 100％にするのもいいかどうかというのも悩ましいところではあるのですけれども、ちょっとそこは分かりにくかったなというのが見たときの印象です。例えば合計欄、下 100％で上にさらに割合を書くとかという書き方もあるかとは思ったけれども、ただ欄が狭いからうるさくなるかなとか、こうすればいいとまではなかなか言い切れないところがありますけれども、いずれちょっと見たときに分かりにくいというのがありました。

あと、せっかくマイク握ったので、続けてお話させていただきたいのですけれども。

○吉野英岐部会長　はい。お願いします。

○谷藤邦基委員　文章表現なのですが、まず 37 ページの５．２の分野別実感について、最後のところで「４分野で横ばいが見られました」となっているのですけれども、「低下が見られました」とか「上昇が見られました」というのは言うと思うのですけれども、横ばいで「見られました」というかなと。だから、ここは「横ばいとなりました」だと多分あ

まり当たり障りがないというか、どっちとも取れるというのもあるので、そこはそう直した方がいいのかなと思ったというのが１つです。

それから、同じくまとめのところで 39 ページなのですが、（１）の「余暇の充実」の実感のところの４段落目です。「一貫して低値で」云々というところの途中からですけれども、「補足調査の結果より」以下の文章がちょっと回りくどいのです。要するに、同じであるというのを２回言っているような感じのところがあって、ここもちょっと整理していただいた方が分かりやすいかなと。本質的な話ではないです。あくまでも文章表現で分かりやすいかどうかだけの話。だから、同じであるとか同一であるとかというのが２回繰り返して出てきているような印象があって、これどっちか要らないのではないのという、端的に言えばそんなものです。

文章表現に関して、私気になったのは以上の２件です。

あともう一つ、実はここに書かれていないことで、なかなか書きにくいかもしれないのですけれども、私ちょっと気になっているのが、以前ティー先生の方から「地域のつながり」のところの実感平均値がずっと下がっているという御指摘があったかと思うのです。たしかそれ、平成 28 年からずっと下がっているということでよかったですよね。これ結構重要なインサイトというか、気づきだと思うので、「地域のつながり」というのはある意味私らとすれば、他に一つ誇れそうな部分だと思っているところでもあるのです。ずっと下がり続けていて、今や３を切ろうかというところまで下がってきているというのは、これはそもそも気がついている以上はどこかに書くべきではないかなと。

ただ、どこに書いたらいいかというのは悩ましいのです。そういうのが入れられるような構成になかなかなっていないので、普通のではないのですけれども、分かった時点で早めにこれは警鐘を鳴らしておくというのも私らの役目ではないかと思うので。ですから、そういう意味でいうと、29 ページ以降のところの「地域社会とのつながり」の実感について説明している中で、ここだけちょっと特殊な構成になるかもしれない、あるいはどこかに本当に１行でいいので、書き込んでおいた方がいいのではないかと。

私がこのレポート（素案）を見て思ったところは、以上でございます。

○吉野英岐部会長　分かりました。基本は、基準年との比較をしてはいるわけですけれども、そのデータが取れているところはもっと前から取れているところがあって、それの中でずっと下がってきているということは、やっぱり大事なことではないかと。最後の御指摘ですね。特に岩手県の一つの特徴として、「地域のつながり」が高いと、ちゃんとあるということを言ってきたわけだから、そういう観点からのレポートもあってもいいのではないかと、御指摘ありがとうございました。

事務局、どうぞ。

○池田政策企画課特命課長　御指摘ありがとうございました。それで、御指摘のところについては修正をかけていきたいと思います。

幾つかコロナのところについては、合計分のパーセンテージを全部見えるようにするのかなとちょっと思っていたのですが、この内訳のパーセンテージは、ここはいいと思うのですが、このところに、全体合計に対しての感じる、やや感じるの合計のパーセンテージ

を入れてしまっているので、違うパーセンテージが入ったもの、混乱するという趣旨だと思うので、合計のところのパーセンテージがなければ、この合計を足せば 100%になるので、内訳のパーセンテージだけ残すということでよいでしょうかというのが１つ。

○谷藤邦基委員　今全体合計に対する割合ということでしたけれども、例えば表のＤ―１―１で､例えば左上の 230 というのは 1,384 に対する 230 の割合ですよね｡そうであれば、素直にいけば右側の横計の合計欄のところを全部 100%にしてしまうというのが一番分かりやすいですよね。一番単純に直すとすれば、そういう形だと思います。

○池田政策企画課特命課長　そうすると、下のパーセンテージは要らない、一番下の合計のパーセンテージは要らないと。

○谷藤邦基委員　下の合計欄、今度縦計の合計欄のパーセンテージというのも、結局右側の 3,549 に対する割合ですよね。そうであれば、それはそれでそのまま残していてもいいのではないですか。

○池田政策企画課特命課長　分かりました。では、右側の方だけ 100%で整理したいと思います。

○谷藤邦基委員　右側の欄を全部 100%にしておけば、すっきり分かります。

○池田政策企画課特命課長　分かりました。そのようにさせていただきたいと思います。
　あと、余暇のところについては御指摘のとおりですので、前の方の全てもうこれ取ってしまえばいいのかなと思っていましたので、そのような整理をさせていただきたいということが１つと、あと「地域社会とのつながり」のところですが、28 年からではなくて、「地域社会とのつながり」自体としては 29 年が一番上がっていて 3.34 でありまして、「地域社会とのつながり」の実感平均点を見ると、平成 31 年が 3.35 です。平成 31 年が 3.35 で、そこから令和２年、令和３年と下がってきているという形、平成 28 年は 3.26、平成 29 年は 3.34、平成 30 年が 3.30 で、平成 31 年が 3.35 で一番上がって、そこから 3.16、今年の 3.09 という形になっているので、記載としては２年連続で低下しているというような記載を、例えば「0.25 点低下しており」の後に続けるようなぐらいの感じでよろしいですか。

○谷藤邦基委員　その程度でもいいと思います。要は、下がり続けているということが指摘できればいいなと思います。

○池田政策企画課特命課長　分かりました。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。
　そのほか、お気づきの点があればお願いしたいと思います。
　和川先生、どうぞ。

○和川央委員　山田先生が何か言いたそうなので、まずは山田先生からどうぞ。

○山田佳奈委員　どうしようかしら。

○和川央委員　私は細かい話なので、どうぞ。

○吉野英岐部会長　では、山田委員からどうぞ。

○山田佳奈委員　私、ちょっと将来の話になってしまうので、どうぞ、先に和川先生。

○吉野英岐部会長　では、和川委員から。

○和川央委員　私は文章表現に関するところになります。

まず、44 ページ、コロナの分析のところになります。これは本当に細かいところなので、申し訳ございません。44 ページ、結果の概要、（１）、（２）、（３）とあって、この結果の概要については、あまり価値をつけずに淡々と結果の概要のお話をして、分析結果のまとめでその概要をまとめるという流れになっていると考えますと、（２）の３行目に「ただし」という表現があるのですけれども、ここは本来はこうあるべきだけれどもという意味合いで「ただし」という表現が入っているかなと考えますと、「また」とかトーンを下げて淡々と書くような形の方が読み方として素直かなと感じましたというのが１つになります。

同じくここの表現で、回答した「場合」という表現が出てくるのですけれども、全体的にこのレポートでは、「回答者」あるいは「回答した方は」という表現を使っていて、「場合」という表現はずっと使ってこなかったかなと思います。ここで「場合」という表現が結構出てきているので、表現を少し整理した方がいいかなという、細かい指摘が１つあります。

２つ目は、概要版との関係性なのですけれども、概要版がかなりシンプルに書き過ぎているせいで、このコロナの部分なのですが、少し真意が伝わっていないのではないかという懸念を感じました。具体的には、概要版の５ページになります。分析結果のところで２つポツがありまして、１つ目のポツ、結果の概要で言えば（２）と対応することだと思うのですけれども、レポートの方の（２）はあくまでも分布の問題、つまり「このばらつきは偏りがなかったですよ」ということを言っているのが（２）です。それに対し概要版の方は「高い割合で分布していた」と言い切っており、視点が少し変わった表現になっているかなと。言っていることの根幹は同じにしたつもりだと思うのですけれども、レポートで言っていることと概要版で言っていることが若干トーンが変わっているので、レポートの方に合わせた方がいいのかなというのが１つ目のポツへの指摘になります。

２つ目のポツにつきましては、ここはレポートで言えば（３）に対応しているのだろうなと思うのですけれども、（３）の考え方がコロナの影響があったと言っている人を調べたらば、実感が低い人よりも、よかったり、あるいは横ばいだったという人が多かったと、そういう関係性が一律ではありませんでしたというのがレポート本体で言っていることと

思います。一方で、概要版ではコロナで悪影響があったと言っている人は実感が低い傾向だったと言い切っているために、よかったり、横ばいだったりというばらばら感があったというところの説明が伝わっていないと感じております。ここもレポートの本体のトーンに合わせて、丁寧に書いてもいいのかなと感じましたというのが大きく分けて２つ目の意見になります。

○吉野英岐部会長　事務局、分かりましたか。

○池田政策企画課特命課長　はい。本体の方はそのとおりですし、概要版の方も記載の方については修正したいと思います。

２つ目のポツの方については、よい影響と悪い影響を書いていて、横ばいのことを書いていないと。

○和川央委員　よい影響書いていましたか。

○池田政策企画課特命課長　ええ。よい影響を感じると回答した人は、全ての「分野別実感」において実感平均値が高い傾向にある一方で、良くない影響を感じると回答した人は、３つの分野において実感平均値が低い傾向にあることが分かったという。

○和川央委員　そして、３つのところは低いのだけれども、実は上がっているところもあったということを書かないと真意が伝わらないかなと思うのですが。これだけの記載だと、悪いと答えた人は実際に実感が悪かったよね、だったら影響あったのではないのか、と読めてしまいます。レポートの本体は悪いと答えたのだけれども、実はよい影響もあったし、横ばいの人も多いし、それが一律ではなかったというのがレポート本体の趣旨ではないかなと感じております。ティー先生、いかがでしょう。

○池田政策企画課特命課長　今のは分野別実感のところが、この段落の趣旨とは違っているのではないかという。

○和川央委員　そういうことです。

○池田政策企画課特命課長　それが最後の段落の趣旨ではないかということですか。

○和川央委員　後で、ちょっとすみません、そこの確認をさせてもらいます。

○池田政策企画課特命課長　了解しました。すみません、分かりました。

○和川央委員　それがないと、ちょっと趣旨が通らないかなと。

○吉野英岐部会長　では、細かい修正指摘は後ほどでもいいですね。でも、大体委員がお

しゃっていることは分かったということでよろしいですか。

○池田政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。
　次、山田委員、どうぞ。

○山田佳奈委員　私は将来的なことも含めてしまうので、若干フライング的なところも含んでしまったら恐縮なのですけれども、まずレポート素案の分析、あるいはまとめにつきましては、御準備いただきまして大変ありがとうございます。このレポート自体については、私としては異議ございませんといいましょうか、であります。
　１つは、書いてくださいという話ではなくて、これはあくまでも平均値がどう動いたかといったことであって、先ほどのワークショップの御意見でもいろんな御意見がその背景にはあったり、生活の変化というのは様々おありだったと思いますが、それを我々頭に入れた上で平均値として分析しているといったことが皆様にも伝わればいいなと、所感としては思っております。こちらのレポートで書けることというのは本当に限られるというのでしょうか、この中で言えることということで、非常に系統立ててまとめていただいたと思っております。
　もう一点は、先ほど谷藤委員さんがおっしゃっていたちょっと気になる点といいましょうか、「地域とのつながり」の平均値が下がり続けているといいますか、これは将来的な話になるのですけれども、今回はとても難しいと思うのですけれども、こういったところを、例えば先ほど若菜委員さんからもお話しありましたように、こうした御意見というのを今後この部会でどこまで取り上げられるかなというのを、先ほど谷藤委員さんのお話を聞きながら考えたところであります。
　もちろんこの部会でのミッションというのがあるわけですけれども、今後、例えば来年度、再来年度、この部会自体はいつまで、再来年度ですか。

○池田政策企画課特命課長　今のところは、やめる予定はないのです。

○山田佳奈委員　これからのところと関わってくるので、フライングで申し上げるのもなんですけれども、ちょっと気になって。「やはりこれは特出しした方がいいのではないか」といったところをどうこの部会ができるかというのは、議論していってもいいのかなと思った次第です。
　それで、あと最後に。すみません、これもフライングなのですけれども、今年度新型コロナウイルス感染症の明確な影響というのは数字上では確認できなかったという、今度は次の調査のときに、つまり次回のＲ４年の調査のときに、果たしてどういう設問がいいのだろうかということを、今日これ拝見しながらはっと思いまして。もうこれで丸２年ぐらいたっていく段階でどういう設問になるかなと。だんだんと行動ですとか、あとこちらのワークショップの御意見でもありましたけれども、価値観がやはり変化して、行動変容、価値変容が多分起こってきていると。つまり定着してきたかもしれない。ちょっとここは

まだ分かりませんけれども、あともう少し続く、少なくとも当面続くであろうこの影響というのをどういう設問で聞くかなというのが、次回ですか、逆に難しいなというのはちょっと考えたところでございます。

だから、ごめんなさい、どうしましょうということは言えないのですけれども、そこの３点でしょうか。

○吉野英岐部会長　お答えできる範囲でどうぞ。

○池田政策企画課特命課長　ちょっと特出しというところについては、今後の御相談というか、どういう段階でそういうもの、２年でどうやったら全部やるのかどうなのかということもあるので、その辺の基準づくりからなのかなと思って、あとコロナの設問のところについては確かにいろんな御意見があるところですが、去年の審議としては、設問とくっつけてしまうと完全にコロナに引っ張られてしまって、逆にその調査としていかがなものかということで、後ろの方に離してコロナの実感とそれぞれの分野別実感を分析していきましょうねという議論の中で整理がされていたものと思っています。

あとはもう一つ、その調査の継続性というものを考えたときに、あまりドラスティックに変えるとなると、今年の調査結果を今度生かしづらくなってくるのかなというところもあるので、よりよい調査となるのであれば、それもあるのかなとは思うのですが、個人的にはこの調査を続けるのであれば、同じような形で、ちょっと設問としてよろしくないところは、それを直していくということはあるとは思うのですけれども、そういう形の方がいいのかなと、すみません、担当案としては考えてはいるところです。

御意見いただいて、次の部会のときにはそういった部分も含めて御議論させていただければと考えるところです。

以上です。

○吉野英岐部会長　よろしいですか。

ちょっとコロナのこと、この後いつ終息するかも、何とも余談でお話しできるものでもないし、昨年の始まった頃であれば、もしかしたら１年たったら終わっていて、オリンピックも十分やれたのではないかという見通しでやっていたはずだったと思いますが、なかなかそれがそのとおりになってはいないのが現状ですので、何ともこれは、我々予言者ではないので、収まっているはずだからこう聞くかというわけにもいかないので、ちょっと難しい点はありますけれども、ぎりぎりまで状況を見て、設問にどう乗せていくかについては、また改めて次の場で議論できればなと思っています。ありがとうございました。

では、ティー委員。

○ティー・キャンヘーン委員　32 ページで、さっき説明していただいて、その地域で過ごした年数が短いで推測されるということはいかがなのかということだったのですけれども、表 20 見てもらっても分かるように、実感、居住年数 20 年以上が下がっているということなので、それ以外は有意ではないということなので、ここは年数が短いということではないのではないかなという。長いでどんどん薄れていったということもあるかなと思うので、

短いではないでしょうねということ。かといって、ではどう書いたらいいかは、ちょっと分からないけれども。

○吉野英岐部会長　長い人の方が下がって。

○ティー・キャンヘーン委員　はい、一般的になってきたという。でも、ちょっとおかしいような気はするのですけれども。では、そこは住んでいる年数が短いのではないかなというのが１点

○吉野英岐部会長　長いと言ってしまっていいのではないかというぐらい。

○ティー・キャンヘーン委員　長いから下がったという、そういうことですね。

○吉野英岐部会長　長い人ほど下がっているという。

○ティー・キャンヘーン委員　ええ。

○吉野英岐部会長　これ、２つの調査のミックスで分析しているのがちょっと難しいところで、ティー先生がお話しされている表 20 というのは、これは県民意識調査、つまり 5,000 人調査から統計的に解析できる答えで、その後ろで文言として述べているのは、補足調査で上がった項目だとこれだったということで、そこをちょっと解釈するとこうなるのではないかというような形で述べられているもので、実は２つの調査結果なのですね。ティー先生が今特に強調されたのは、5,000 人調査の方ではこういう傾向が読めるのではないのかと、それでいいのではないかというような御指摘だと私は思ったのですけれども、それでよろしいですか。

○ティー・キャンヘーン委員　その地域で過ごした年数だからといって、短いとは限らないですか。そういう 600 人の調査でも。

○吉野英岐部会長　そうそう。短い、長いは、実は書いていないので。長い方で理由が説明つくのではないかという御指摘です。
　どうぞ、事務局。

○池田政策企画課特命課長　では、そこのところはそのように修正をさせていただきたいと思いますが、実はもう一つ気になっているところがあります。30 ページをちょっと御覧いただきたいのですが、「地域社会とのつながり」のところにその地域で過ごした年数というのがあって、居住年数を見ると 10 年未満と 20 年以上の二極化を起こしているというものなのです。当然母数としては、20 年以上がこの県民意識調査上は非常に多いということにはなっているのですが、一方では 10 年未満も有意になっており、ここのところが両極端に振れているので、記載の整理が必要なのかなと考えているところでございます。いかが

でしょうか。

○吉野英岐部会長　整理というか、要因分析をやるということですか。

○池田政策企画課特命課長　そうです。今、年数が短いことという書きぶりになっているから、このままでいいかというところ。

○ティー・キャンヘーン委員　すみません。これもちょっと感想なのですけれども、ワークショップで若い人がもともと関わりないのでというような感想が一方あって、一方は子育て終わったということを言っている方もいて、ということは結婚する年齢が上がってきていて、若い層はつながりあまりないと。高齢化になっていて、どんどんとつながりが薄れていくという２つが感想なのです。絡んでいるような視点。よくよく見てみると、29 ページに書いている 30 代から 70 代全員下がっているというレポートもあって

○吉野英岐部会長　下がっているにしても、理由が違うとか。

○ティー・キャンヘーン委員　その中でね。

○吉野英岐部会長　中で。

○ティー・キャンヘーン委員　だから、何かここだけ、ちょっとすみません、個人的に危惧しているところがちょうどつながったというような、そのワークショップとの関連で、あまり意見は少ないかもしれないけれども、何か一つの社会問題かなと思いました。ちょっと答えになっていないけれども、すみません。

○吉野英岐部会長　一つの解釈で全てが説明できるというほど現実はそう単純ではなくて、むしろ年代毎に要因が違うので上がって、あるいは下がったというような解釈もそれぞれあり得るかなと。

私自身もこれ全体見ていると、数字が載っているところは、これは全て全体調査なのです。県民意識調査、どの表を見ても、どのページのどの表も全て数字が載っているところは 5,000 人調査の結果を踏まえて書かれているということです。だから、あくまで量的に解析していくと。そして、文言でいろいろ要因を説明しているところは、実は補足調査で出てきている御意見も入れているので、これは補足調査から引っ張ってきたものと文章の中でももちろん書かれているのですけれども、実はもういろいろこれまで議論はしましたけれども、サンプル数は全然違っていて、これは全員答えていないですけれども、5,000 人調査という大きなサンプルでやっている量的調査と、600 人という一定限られた数字でやっている補足調査で、量的には 5,000 人調査の方が確度は高いので、基本は量的にはそこで全部結論出していくのですけれども、残念ながら 5,000 人調査の方は要因までは分からないのです。聞いていないというか、設問に入れていないので。したがって、要因については補足調査を踏まえた上で、補足調査で上がってきている要因をこのレポートの中でも

使わせていただいているということなのですけれども、そもそもサンプル数が少ないところなので、確かにその要因で書かれていること全てが説明できるかというと、そこは確かにサンプル数の問題もあるし、細かくクロスをすればするほどもっとサンプル数が減ってしまうので、そこは難しいというのをちょっと感じながら今見ていたのですけれども、ティー先生、いかがですか。

○ティー・キャンヘーン委員　なので、もうそのままここに挙げたア、イ、ウあります。30 ページ見ていますけれども、ア、イ、ウをそのまま載せて、ア、イは減ったとか書いてある。

○吉野英岐部会長　イの途中でチェンジされているのです、使うソースを。

○ティー・キャンヘーン委員　それでも、そう書いてあるの。

○吉野英岐部会長　読めば分かるのですけれども。

○ティー・キャンヘーン委員　そうですね。

○吉野英岐部会長　だから、２個の調査を踏まえて、途中でその調査、使っているデータを別のところから行ったもので書き込んでいるのはどう思われますか。
　和川委員。

○和川央委員　今吉野先生おっしゃったように、２つの異なる調査を用いて解釈をするというのが一つ課題なのですが、２つ目の課題は、補足調査で「過ごした年数」としか書いていないのに、それを部会として「過ごした年数が長いこと、短いこと」と解釈をしていいのだろうかというのが多分ティー先生の指摘する課題なのだろうと思います。

○ティー・キャンヘーン委員　全部書いてあるの。

○和川央委員　はい、そうですね。なので、例えば 32 ページで「過ごした年数が長いこと」と修正されるのであれば、ここは長いことスラッシュ短いこととか、価値を与えないで事実を書くことで、少なくともティー先生の課題は解消できるかなと考えます。

○吉野英岐部会長　事務局。

○池田政策企画課特命課長　私も今同様に考えておりまして、33 ページちょっと御覧いただきたいのですが、同居のところ、同居しているからうまくいっているところもあれば、別に住んでいることでうまくいっているところもあってということで、ここのところだけ同居あるいは別居という形を書かせていただいたと。こういうような整理で、「地域社会とのつながり」のところにいくと、長いもしくは短い、このところで統計的に出ているので、

そこのところを両方併記できるような形での整理をさせていただきたいと考えてございます。

○吉野英岐部会長　ぱっと読んだ人がどっちなのと思うかもしれませんけれども。前後を全部説明すれば両方あるのだなと分かるけれども、ぱっと読む人は長いのが要因なのか短いのが要因なのか、なぜ両方書いてあるのかという、分かりやすく伝えるところにどうやって工夫してうまく読み手にこの結果を伝えていくかというのは、本当に今工夫しどころだなと思っていました。

○ティー・キャンヘーン委員　両方が原因であるような視点。短い方も原因があって、長い方にも原因があるという。よく見て、読む側からすると、両方原因があるなと読めないですか。

○吉野英岐部会長　読めない。

○ティー・キャンヘーン委員　読めないのですか。部会長、読めない。

○吉野英岐部会長　長いと短いとどっちなのかが読めない。

○ティー・キャンヘーン委員　そっちか。

○吉野英岐部会長　今のように、善意で解釈すれば長いということも要因だろうし、短いということも要因だろうしという、心の広い読み方をすればそう読めますけれども、どっちか、どっちなのと言われると、両方という人しか言いようがないのです。

○ティー・キャンヘーン委員　そうですね。

○吉野英岐部会長　その辺の文章上の工夫については、ちょっと一定の配慮が必要かなとは思いますけれども。

　そのほか、若菜委員や竹村委員、御感想でも結構ですけれども、ありますか。よろしいですか。

　では、竹村委員。

○竹村祥子委員　感想になってしまうのですけれども、今度コロナの影響が悪い方であったと答えながら、実際には幸福感が上昇しているというところがやっぱり気になっています。特に家族、子育ての関係のところにそれが起こっているように思っておりまして、全国でいろいろと家族の生活や子育てに大きな政策的影響があったにもかかわらず、例えば岩手では比較的早いうちに日常の従来どおりの生活に戻っていったというようなことがあるとすれば、比較的幸福感を上げる条件になるのかなと思ったりもするのですけれども、そのことについての説明は、今回のデータからは推測しかできなくて、次回以降の大仮説

みたいなものでしかなくて、書けないことだと思うのです。書いてはあまりよくないことと思うのです。

ですけれども、次回の調査のときに、データが今度はどう動くかということに関しては、少し予測をしておいた方がいいのかなと思っていて、従来どおりの生活に早めに戻って、要は変わらなかったということによって幸福感が上がっているのだとすれば、この調査はそのまま、傾向としてコロナでちょっと動いたけれども、その傾向というのはコロナの影響に見えるが実は違う要素が考えられる、と考察されるのだと思います。例えば、パソコンの普及が急がれて、学校の中にパソコンが普及したみたいな話というのは、コロナへの対応が必要であったために、従来であれば、ゆっくり進んだはずの計画がコロナのこと(リモート授業への対応の必要)で全国並みに繰り上げて進んだといった評価になるのだと思うのです。

だから、幾つか気になるトピックというのは、今回の審議会の報告とか、それから議会への報告だけではなくて、最終的なまとめの後にちょっとそこのところについては確認をして、来年の２月の調査の後にどう変わっているのか、１年で変わらないかもしれないし、変わるかもしれないので、そこをちょっと後でチェックしておいた方がいいなというのが感想です。

以上です。

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。今年まだコロナの影響の調査１回しかやっていないので、ちょっと。これだけコロナが長引くということも、私たちも想定はしていなかったところもあるので、そういうことも踏まえながら、確かにどうそれを聞いていくかというのは、これも今回のレポートに直接の記述で反映できないところがありますので、竹村委員の御指摘を踏まえた上で、次どう聞いていくかとことに生かしていきたいと思います。ありがとうございます。

若菜委員、どうぞ。

○若菜千穂副部会長　私からも感想というか、今後に向けてなのですけれども、これ何年目でしたか、今３年目ぐらいでしたか。例えば５年後ぐらいでこの分析方法の評価みたいなのも、やっぱりうちらではなくて第三者とかにやっていただいたらいいのかなというのが１つと、あと例えば上がりました、上がった要因はこれですというのだけでは、私はやっぱり片手落ちだと思っていて、基本的にプラスマイナスの人、コロナでもいい面は、今竹村先生おっしゃったように、いい面、悪い面が結局あって、おしなべると上がりましたみたいな、では上がったところだけ表現すればいいのかというと、そうではなくて、だから補足調査の自由記述とか、ワークショップで出た細かい意見も私はもっと記述していくべきだと思っていて、全体的な書き方としては、数値としては上がりましたと。ただ、上がった要因というか、それはもう本当に言葉の部分で、上がった意見はこういうのがあるし、一方で下がりましたという意見はこういうのがありますと、基本的には多様なのですというところをぜひどういう形でかはいずれ表現いただきたいなと。数字ではこう読めますということであれば、この委員会もそろそろもう大丈夫かなという感じもあって、多様なのだというところもぜひ書き込んでいくような方向性に今後なっていったらいいなと。

多様なのだというところは、忘れてはいけないかなと思っていますので、来年とかではなくていいので、５年の見直しとか、そういうところでぜひちょっと御検討いただければなと思います。

○吉野英岐部会長　ありがとうございました。御意見として、来年の調査、あるいは分析に反映できればなと思います。

そのほかはいかがでしょうか。

今年度は従来型の調査の解釈と、それからコロナを入れたコロナの影響についての解釈をそれぞれ一応別立てで考えさせていただいたということが大きな点になっています。

それから、途中でも申し上げましたけれども、たくさん数字が出てきているレポートですので、数字がなかなか読みづらいということもあったと思うのですが、何度も言っているように、この数字はあくまで県民意識調査から出してきた数字であって、実は補足調査の結果は数字化はしていないのですよね、今回。補足調査の属性は最初に御紹介して、どういう人がいましたよとか、それはやっていますけれども、補足調査の答えを県民意識調査と同じように示したかというと、そこは実は全部カットしていて、補足調査の中での要因に関わるところだけをピックアップして、それを上がったところと下がったところと横ばいのところに振り分けて、分野別に上がったと感じる人や下がったと感じる人にさらに分けて、補足調査をそう使っているということだと思うのです。

ですから、補足調査でももし数字出せと言われれば、同じようにやっているので、出さないわけではないのですけれども、あえてそこは出していない、むしろ質的なところの補強に補足調査をかなり使っているというようなのがもうちょっとうまく説明できると、何か全体調査をそのまま説明できてしまうような、要因のところで補足調査がもう全体調査をそのまま説明するようにも受け取られかねないかなというのはちょっと心配していて、補足調査というのはあくまで 600 人を対象とした中で、さらにその要因のところだけを抽出しているものであるので、必ずしもこれが全てを説明し尽くしているものではないし、数についてそれが何人いたのだということについても、一つ一つよく見ればそんなに何十人もいた答えが出てきているわけではなくてという意味では、実はワークショップでいただいた答えも含めて、やっぱりこの全体調査の動きを私たちなりに分析するときに、多様な声を聞いたり、それを踏まえて解釈をしたりと使うものであって、補足調査の結果から全てが要因を説明できるというところまでは、やはりあまり踏み込んでいないし、こういった答えがあったというところまでは言えましたけれども、それによって説明能力は何％ぐらいあるのだと言われると、それはちょっと難しいなと思います。その辺をうまく伝わるように書き込んでいくしかないかなと思っています。

だから、補足調査というのは、本当はもっとちゃんといろいろなことを聞いてはいるのですけれども、かなり抜き書きして今回使っているというようなことをぜひぜひうまく伝えられるようなレポートにしていきたいと思います。

ですので、若菜委員がおっしゃったような、補足調査、３つぐらいしか意見出ていない、上位の３つというと、これとこれとこれにはなっているけれども、実は立場や、あるいは年代、置かれた状況によって様々な要因があって、その結果として全体調査のようなものが生まれてくるのであって、なかなか１対１で全ての動きを一つの要因で説明するという

ところには、まだ我々自身も到達できていませんし、そこまでまだやれる材料もそろっていないというような書き方の方が私は丁寧かなと。全部説明したがってしまうのだけれども、そこまでは説明し切れないということで、やっぱり来年さらに調査を改良することによって、こういった動きをどれだけ多様な要因の中からより確度の高いものを拾い上げていくかということは、引き続きこれは努力していかなければいけないかなと思っています。

基本となるのは、やはり全体の県民意識調査ですので、ここの結果をきちんとまずお伝えするということを私は主眼に置いて、要因分析をするとすれば、こういった意見があったというような見方を御紹介するというところで、あまり全てを説明し切っていないではないかと言われても、それはある程度この今の状況では、データの制約もあることから、質的なデータで全ての量的な要因を説明し切るまではさすがにいけないだろうなということは、いろいろ読んでいるうちにだんだん、だんだん気がついてくる。どうしてもそれをちょっとセットでまとめてしまうと、全部つながっているように読まれるのかなということで、違う調査を２個使ってやっているのですということをうまく読んでいる方々に分かっていただけるように、もうちょっと工夫してもいいかなと思いました。

まさにさっきの表の問題が、横 100％にするのだけれども、それでは全体のパーセントが分からないから、横は 100％にしないで縦計でやったというのは、一遍に１つの表で２つのことを説明しようとやったのだけれども、そうなると何に対する何％なのだというのが逆に分からなくなるおそれがあるのではないかということで、やっぱり横計は 100％にして、もしそれぞれの項目のパーセントを見たいのだったら、それは別表を作らなければいけないとか、円グラフでまとめておくとか、あまり手間を惜しんでしまうと、２つの実は狙いが１つのところに入ってしまっていることを、我々は分析ずっとやっているから読めますけれども、初めて見た方はどこに対するどの数字なのというようなお考えがあると思うので、そこはなるべく丁寧に御説明していくべきかなということも感じました。

全体的にはそういう印象を持っていますけれども、我々が今やれる、持っている、手持ちの情報でやれることについてはおおむね書き込まれていますので、少しさらに修正をかけた上で報告書として、素案の次になりますか、まとめていただく形で進めたいと思います。

若菜委員、竹村委員、よろしいですか、先に進めて。

「はい」の声

○吉野英岐部会長　ありがとうございます。

それでは、これは概要版も説明したことになるのかな。

○池田政策企画課特命課長　はい。

○吉野英岐部会長　よろしいですか。

では、ちょっと委員からの意見を修正して、次回さらに最終版のような形で出していただくということにしたいと思います。

（３）その他

○吉野英岐部会長　その他が一応用意されておりますけれども、その他、事務局からはありますでしょうか。

○池田政策企画課特命課長　特にはないです。

○吉野英岐部会長　よろしいですか。今後のスケジュールについての御説明とかはよろしいですか。

○池田政策企画課特命課長　最後に御案内しようと思っていたのですが、次回は９月 13 日の午後１時半から、一応エスポワールいわての方での開催を予定してございます。

○吉野英岐部会長　一応事務局からの連絡事項は以上ですけれども、委員の方から何かありますか。

「なし」の声

○吉野英岐部会長　では、次回さらに改良された最終版に近いものが出てきますので、総合計画審議会に出すのは 11 月の予定ということですので、ワークショップの結果も次回また出てくると思いますので、それらも踏まえて最終版をつくっていきたいと思っています。

では、私の方からは以上ですので、事務局にお返しします。

３　閉　会

○高橋政策企画課評価課長　長時間にわたり、御議論いただきましてありがとうございました。

以上をもちまして第４回の部会を終了いたします。本日はありがとうございました。